

## 高齢者の学校における世代間交流 ——ノルウェーの場合——

家族・地域支援学科 草野 篤子・嘱託研究員 石橋 ふさ子

### 1. まえがき

スウェーデンのストックホルム大学教授アン・クリスティン・ボストロム（Ann Kristin-Bostrom）氏とのICIP（International Consortium for Intergenerational Program）の国際会議で雑談をしていた折りに、スウェーデンの「クラスのおじいちゃん」プロジェクトが、ノルウェーに飛び火し、美しく開花しているという話を聞いた。その後、世代間交流の国際学術誌（Journal of Intergenerational Relationships）にノルウェーの「学校のおじいちゃん・おばあちゃんプロジェクト（“School Grandparents Project”）」の論文が掲載されているのを見つけた。ボストロム氏は生涯教育に関して多くの業績を積んでおり、国連のUNESCOや、特別支援教育にも貢献している。スウェーデンの子どものための「クラスのおじいちゃん（Klassmorfar）」計画の理論的バックボーンをとなっており、このプロジェクトは、ノルウェーの「学校の祖父母」プロジェクトと多くの共通点を持っている。スウェーデン・モデルの「クラスのおじいちゃん」プロジェクトは、高齢者は有償で学校現場で働く。適性のある候補者があれば、職業紹介所が「クラスのおじいちゃん」事務局に直接連絡を取り、事務局が面接試験を行い、数ヶ月にわたる研修をした後に、学校で「クラスのおじいちゃん」として働くシステムになっている。ノルウェーの場合には高齢者は無償で働き、スウェーデン・モデルとはこの点では大きく異なっている。ボストロム氏は、国際的見地から見た世代間交流と学校における「クラスのおじいちゃん」プロジェクトに関心を持っており、ノルウェーのプロジェクトは勿論、その他ヨーロッパ

をはじめ多くの国々にも少なからぬインパクトを与えている。

### 2. ノルウェーにおける「学校の祖父母」（通称：学校のおじいちゃん・おばあちゃんプロジェクト）“School Grandparents” Project

ノルウェーにおける「学校の祖父母プロジェクト」は文部研究省からの委託により、小中学校教育委員会（Directorate for Primary and Secondary Education）が2003年に実施し、2006年に終了したものである。目的は、学校における高齢者と児童の世代間交流の良きモデルケースを構築するためであった。プロジェクトには、全国で選ばれた10校の小・中学校が参加した。学校の選考はノルウェー自治体協会（KS）と自治体の代表者でおこなわれた。実際の運営は、文部研究省、教育／研修委員会、ノルウェー年金協会、ノルウェー自治体協会、教育ユニオンそれぞれの代表から構成され運営委員会によって運営された。プロジェクト責任者は有償で、参加校の校長が出向し勤めた。対象グループは、小学生および中学生と年金受給者シニアの年代の人々である。

ノルウェーでは高齢者は貴重な人材として扱われ、「学校の祖父母」は決して学校の教師やスタッフの代替えではなく、学校における「おじいちゃん・おばあちゃん」として活動する。学校全体の祖父母であるので、必ずしも生徒たちと血のつながった祖父母である必要はない。

高齢者（シニア市民）は社会の中で多数を占め、多くの人はまだ健康もエネルギーも十分に備えて

いる。また、背景は様々で、多様な職業的背景と経験をもっている。彼らは、社会において貴重な存在であり、人材であり、彼ら自身も意義深い仕事をすることが出来る。異世代の人々が交流することは、全ての人にとって大切なことである。高齢者世代は、文化、伝統、歴史、知識、経験の継承に貢献する。高齢者と若者との交流は、健全な成長と安心につながる。これは、学校内に限られたことではなく、全ての人に当てはまる。老若世代両方が前向きに受け取り、誰にとってもプラスの結果をもたらす。

学校でのおじいちゃん・おばあちゃんは、子どもたちの実際的な側面での勉強に寄与するのみならず、社会的成長にも多大な影響を与える。



プロジェクトの参加者は基本的には無償ボランティアである。

2010年9月、筆者たちがノルウェーを訪問した際には、このプロジェクト自体は2006年に終了していたが、当時のプロジェクト・マネージャーが、最近の継続状況を、プロジェクトを委託した文部研究省と、委託によって実施した小中学校教育委員会 (Directorate for Primary and Secondary Education) に報告に行くのに同行させてもらった。

以下はプロジェクトの詳細である。

#### (1) 組織

プロジェクトは教育・訓練委員会のもとに遂行され、実際のプロジェクト担当責任者は参加校の校長が出向し、有給休暇の扱いで50%学校からも支払われていた。

実際の運営は運営委員会によってなされ、委員は年に2回集まった。

運営委員のメンバーは、教育・研究省、教育・研修委員会、ノルウェー自治体協会、実際の運営は、文部研究省、教育/研修委員会、ノルウェー年金協会、ノルウェー自治体協会、教育ユニオンそれぞれの代表から構成されている。

地域の事情も異なるので、参加各校がプロジェクトの内容を独自に企画し、「学校の祖父母」がどのように学校行事に参加するかを決めた。内容は、運営責任者を通じて運営委員会に報告した。

また、参加校同士が緊密に連絡を取り合って、それぞれの経験から学びあうことが奨励された。参加校全部の代表が年一回集まり各校の活動を発表し経験を分かち合った。

#### (2) 財政

参加校は財政的援助はどこからも受けていない。プロジェクトの予算は非常に低額で、プロジェクト責任者の給与、旅費と会議費を含む程度である。その他、学校のウェブ・サイト用の費用が含まれている。

#### (3) 実施

各参加校は地域の条件に従って自分たちでプロジェクトを企画した。それぞれ異なった企画であったが共通点も多々あった。共通していることは、祖父母は週一回、一年生の生徒たちと過ごすことである。勿論、週一回以上参加することもあり、また、一年生以外の生徒と過ごすこともある。

#### (4) 参加校の例

2010年9月に、筆者たちは、トーテン地域にある参加小学校の一つを訪問することが出来た。



月曜日であったが、朝一番で約 17 名の学校のおじいちゃん・おばあちゃんが学校の一室に集まり、まずは、高学年の生徒が作ったワッフルとコーヒーをいただくことで始まった。

何人かにインタビューしたが、皆口をそろえて、「自分たちでも役に立ててうれしい」「生きがいを感じる」「日々、心待ちにすることがあって楽しい」など、前向きの返事であった。



そのあと、学校の祖父母はそれぞれ希望の教室で、生徒たちと過ごした。ある祖父は野外で、ある祖母はお料理教室で、また、別の祖父は木工室で一年生と一緒に作業した。



ノルウェーでの世代間交流に対する関心の強さを示すものか、翌朝には新聞の一面と中二面を使って、「学校の祖父母」活動と筆者たちの学校

訪問を掲載していた。



プロジェクトの他の参加校：

Abildso School

週一回、一年生と過ごす。主に図工、木工教室。通常 1 人～数人が参加。

Boverbru School

ここでは、祖父母の活動は毎週月曜日に中学一年生が世話をするカフェーからはじまる。1-4 年生混合のグループと読書、お料理、木工、野外活動など様々な活動に参加。一日の最後には、15-20 人位のシニアが参加し、体操を一緒にして終了する。このモデルを習って、スペインでも 3 校で実施されている。

Frogner School

地域の年金受給者協会と学校の記念祭実行委員会が協力して開催。一年生のために読書をし、上級生とは様々な図工活動を一緒にする。

Grong Primary and Lower Secondary School

地域の年金受給者協会と共同で活動。参加希望の年金受給者のリストをつくり、必要に応じて登録者に連絡する。彼らは、学校で地域と生徒のために参加する。

Hokksund Primary School

毎週一回 3 人が参加する。読書のグループ、お話しのグループ、歴史のグループがある。学校の全生徒が参加する。

## Konnerud School

Happy Days とよばれる学校のプロジェクトに関連づけている。全校生徒を対象にし、特に創造性を伸ばすための授業と体育に重点を置いている。毎週木曜日に実施し、3時間を4週間続ける。8人の学校の祖父母が参加する。



## Nattland School

地域の施設をたづねて参加者を募る。毎週一回、二人の祖父母が図工と料理教室に参加する。

## Skoger School

学校の祖父母は殆ど毎日学校に来て、すべての学年の生徒と過ごす。先生が、「必要なこと」を告げ、それにしたがって祖父母は振り分けられる。今年度は、祖父母による宿題の手助けを試みている。

## Sobakken School

年金受給者は学校で図工のクラスを生徒たちと共にするが、また、一緒に地域の社会的な集まりにも寄与する。

## Varteig Primary and Lower Secondary School

この学校は、プロジェクトを地域の農場と協働し、「農場を教育の資源として」とうたって伝統的な技術や習慣に関する知識を伝えることに焦点を置いている。学童全員が参加し、年金受給者側は10人ぐらいのグループで構成されている。

上記の例でみられるように、学校の祖父母の活動内容は様々である。休み時間や登校時にも参加してもらい、実際的な話や思索的な話題について話し合うということも考えられている。

これらは一重に、学校の祖父母の協力があって実施されたものであると先生方は強調している。

## (5) ネットワークづくりのための会議

ネットワークづくりのための会議を三回開催している。参加者は運営委員と各参加校から2名づつ、先生、校長、そして祖父母たちが出席した。

第一回会議は2004年の3月に行われた。ブレインストーミングとしてグループ討議が行われ、参加者は「学校の祖父母」の概念、機会、チャレンジなど自由に討議することが出来た。最終日には、総会がおこなわれた。

第二回会議は、全ての参加校がプロジェクトを開始して経験を積んだ時点で、2005年5月に開催された。そこでは、各校のプロジェクトの実施内容について話し合ったが、加えて、講師としてストックホルムの国立スウェーデン学校開発庁からアン・クリスティン・ボストロム氏を招き貴重な講演をしてもらった。ボストロム氏は生涯教育に関して多くの業績があり、UNESCOのためにも貢献している。また、スウェーデンの子どものための「クラスのおじいちゃん (Klassmorfar)」計画に詳しく、このプロジェクトは、ノルウェーの「学校の祖父母」プロジェクトと多くの共通点を持っていることを示した。ボストロム氏の講義のタイトルは、「国際的見地から見た世代間交流とスウェーデンの学校における「クラスのおじいちゃん」」であり、その後のノルウェーのプロジェクトに大きなインパクトを与えた。

これらのプロジェクトはお互いに関心を持って、緊密に連絡を取り合っている。

第三回会議は2006年5月に開催された。目的は、それぞれの参加校から各自の経験を聴取することであった。参加者は分科会に分かれ、質疑応答を行い、それぞれの内容はまとめて総会で報告された。これらは、その後の展開に貴重な問題を提起した。マスコミも非常に好意的に報道した。

参加校はいずれも多大な意欲と熱意をもってこのプロジェクトを受け止めていた。会議の結論は非常に前向きなもので、プロジェクトの終了後も



全員ネットワークを維持し協働することを約束している。

#### (6) 学校の祖父母 専用ウェブ・サイト

2005 年の春には独自のロゴをもってウェブサイトを立ち上げ、プロジェクト責任者が編集者となって諸々の情報と発想を伝え、参加校およびその他の一般学校にも有益なものであった。

#### (7) プロジェクトの評価

##### 1) 学校の報告

16 の質問からなる評価用紙を参加校が提出。ただし、プロジェクト開始前にはいかなる事前調査もなかったもので、評価をするうえで、比較の点では限界があった。しかし、各参加校がどのように取り組んだか、自分たちの評価ではどの程度成功したか、また、プロジェクトの終了後、継続を考えているかどうかなど、全体的なものははっきりと見えている。

学校の祖父母は時間があるので、ゆっくりと耳を傾けることが出来、お話をしたり、慰めたり一緒に遊んだりする時間がある。祖父母は子供たちに安心感を与え、教師には教える時間を与える。また、学校の祖父母は子供たちの学校の成績にも良い影響を与え、それだけでも良い結果であると考えている。各参加学校がプロジェクト期間が終了しても継続したいと結論付けているこの学校報告書は非常に教訓的である。

##### 2) 学校の評価のまとめ<sup>i</sup>

Q1. 学校の名前・生徒数と先生の数・地域: 参加校は全国に平等に配置されている。生徒数は 100 から 500 人

Q2. 各地域の目的: 学校と高齢者両方に利点があることが重要である。

Q3. 学校の祖父母はどのように募集されたのか?

最も一般的な方法は、各家庭に手紙を出す方法。加えて、ほとんどの学校では、地域の団体、特に年金受給者協会に連絡を取った。

Q4. ほかに方法を考えられますか?

色々な学校行事にシニア市民を招待して、直接募る。また、シニア自身に仲間を誘ってもらう。

Q5. 年金受給者協会、シニア市民協会などの団体に連絡を取ったことがありますか?

この団体が参加者募集のための一番一般的な連絡先です。シニア市民協会にも連絡を取ります。その他、ノルウェー女性公衆衛生協会、歴史協会、その他地域の団体。

Q6. 財政: この企画は学校予算から費用を支出しましたか? それとも別の予算ですか?

学校は飲食物代や活動のための材料費を支払ったが、それは学校の経常費から。

Q7. この企画は学校運営上どのように位置づけられましたか?

殆どの学校では、経営陣からなるプロジェクト・グループを設立。

Q8. 参加した学校の祖父母の数: 企画の内容自体がそれぞれ違ったので参加者の数も異なった。2-30 名。平均各校 10 名。

参加日数: 学校によっては毎日の参加もあったが、一般的には週一回の参加。

Q9. どのような活動に参加したか?

様々な活動が挙げられたが、重点は図工、木工、手作業、家庭科、演劇、体育、戸外活動、歴史、読書、農業

Q10. 学校の祖父母は学校環境に影響を与えたか?

勉強上と社会的に良い影響を与えたと全ての参加校が答えている。

Q11. どのくらい学校の祖父母用のウェブサイトを利用したか?

全ての学校で認識していたが、半分が頻繁に利用し、あと半分は時々利用。

Q12. ウェブサイトに関して意見がありますか?

他校でやっていることがわかり、良い事例を参考にするのに非常に役立った。

Q13. 学校は学校の祖父母を今後の計画にいらしているか?

全ての学校で継続したいと望んでいる。殆どの学校で協働を考えている。いくつかの学校では、読書グループを始めたいと思っている。

Q14. この企画を発展させるためにはどうすれば

よいか？

- ・高齢者の希望に応じるため彼らの話をよく聞くことが重要。
- ・達成目標を高過ぎるところに置かない。
- ・プロジェクトの参加校間の連絡をよくする。
- ・もっと多くの参加校を募ること。
- ・プロジェクトはお互いに有益であり楽しめること。

Q15. 地域レベルと国家レベルでの全体的な学校の評価

全参加校がプロジェクトに非常に満足

Q16. その他のコメント

多数の参加校が、経験を分かちあうために年一回のネットワーク会議を継続していきたいと述べているが、ここで忘れてはいけないことは、学校の祖父母は、学校のスタッフにとって替わる人材ではなく、生徒、先生、学校の祖父母、そして両親は皆協力関係にあること。

3) 学校の祖父母とのインタビュー

プロジェクト責任者が4つの参加校の祖父母の何人かとインタビューを行った。

分かったことは、参加したシニアは、皆このような計画に参加する機会があったことを非常に幸せと感じていること。やっていることを重要と感じ意義を見出すと同時に、彼ら自身の人生にも新しい何かが起こっていると感じている。何人かがインタビューの中で、世代間交流の重要性を指摘した。

彼らは、自分が良い例を示す役割を果たしていると自認している。一人が「子供は我々を必要としているし、われわれは子どもを必要としている」といった。

4) 学校の祖父母に対する質問表 (2006 年春)<sup>ii</sup>

Q1. なぜこのプロジェクトに参加したか？

殆どの「学校の祖父母」は何らかの接点があった(孫、以前の従業員、学校スタッフとの知り合いなど)。何人かは、学校から連絡があった。

Q2. 子どもとの交流をどのように感じるか？

シニア市民は子供に対して非常に多くの前向き

なコメントをした。また、子どもたちが彼らに非常に感謝していることを知っている。交流は勉学と社会的なものであるが、主に社会的側面においてである。

Q3. 今日の若者との出会いをどのように感じているか？

シニア市民の何人かが、子どもは小さいほど容易に成長する。同様に子供たちは幸せで満足していると信じている。シニア市民ははっきりと多世代間の交流は必要であり重要であるとみている。

Q4. あなたが参加した感想を3語で表現してください。

それらは、①前向き (positive) ②向上 (edifying) ③知識が得られて有益で楽しい (informative and fun)

Q5. あなたは、団体と学校の活動に影響があると思いますか？

通常計画を立てるのは学校と先生たちである。まれに、シニア市民が率先して計画をたてることもある。おそらくこの方法をシニア市民は望んでいると思われる。

Q6. あなたはどこかの団体に属していますか？

全員、2-3の地域か全国的な団体に属している。

5) マスコミ報道

このプロジェクトは、新聞、ラジオ、テレビなどによって非常に好意的に報道された。中でも全国放送協会 (NRK) が2008年にトーテンの小学校を取材しTVで放映したものと、2006年にドラメンの小学校を主題にTV放映したものは特記すべきである。また、2006年には、2面にわたる全国紙VGでの記事も紹介された。これらはすべて、非常に好意的で、反応も良かった。

また、2007年には世代間交流の国際誌であるジャーナルにも記載され、米国の世代間交流関係のニュースレターにも記載された。

(8) 協働プロジェクト

1) Reading Friend Project (読書の友)

このプロジェクト実施中に、各種の団体から協働の申し出があった。例としては、2005年に、

ボドー (Bodo) 大学, ボドー自治体, U3A 大学 (University of the Third Age) が協働で「読書の友」(Reading Friend) というプロジェクトをボドー地区ではじめた。これは, シニア市民が小学校の2年生と3年生に本を読んで聞かせるものであるが, 本をもっと多く読むことによって子供が読書好きになることを目指している。このプロジェクトは非常に成功して, 2007年時点で40人の年金受給者がボドー地区の学校で参加している。

## 2) Between the Generations (世代の間で) プロジェクト

もう一つの協働プロジェクトは「世代の間で」と名付けられ, 保健・社会問題委員会, シニア市民委員会, 野外活動年2005が実施した。目的は, 世代間の壁を取り除くための様々な活動に焦点を当てることである。

このプロジェクトの活動内容をパンフレットとして国内の全小・中学校に配布した。

## 3) 国際協力

ノルウェー国内の関連プロジェクトや団体との協働に加え, 他国に於いて実施されている同種のプロジェクトと協力関係を結んでいる。スウェーデンの“The Class Grandfather for the Children”は, 1996年にスタートしている。

プロジェクトの成立は違っているが, 共通点の多いプロジェクトである。2005年にはノルウェーの代表が総会に出席し, 緊密な関係を保っている。また, ICIP (国際世代間交流協会) をとおして, いろいろな国と情報を交換することが出来ている。スペインでは, ノルウェーの学校の祖父母をモデルケースとして, 国内三つの学校で実施されている。<sup>iii</sup>

## (9) 成功判断基準

このプロジェクトが成功したかどうかの判断をするためには, まず, 学校が学校の祖父母に参加してもらうことの利益と可能性を知っていないといけない。また, このプロジェクトを学校の他の計画の一部として包括的に見る必要があるであ

る。また, 高齢者自身が参加を自ら希望するものでなくてはならない。

学校の祖父母プロジェクトを継続するためには, できるだけ高齢者自身を計画の段階から組み込むことが重要である。シニア市民が自分たちが役に立っていると感じ, 自分の得意な分野で活動できていれば, かれらは興味をもって参加しつづける。役割の範囲で出席し続け, 興味を持ってくれ。彼らには, はっきりした範囲と同意が必要である。

学校の祖父母を募集するのに一番効果的な方法は, 高齢者自身に他のシニア市民を募ってもらうことだ。

プロジェクトが終了した今, 誰かが蓄積された知識を収集して普及させ, 確立されたネットワークを維持することは重要なことである。

## 3. おわりに

プロジェクトは, 参加校・参加高齢者すべての人が高く評価しており, 子どもたちへの影響も明らかに良い結果が表れている。

「学校の祖父母プロジェクト」を委託した文部研究省の代表, 実施した小中学校教育委員会の代表, 並びに, このプロジェクトのプロジェクト・マネジャーと筆者たちのミーティングで, 国側は, 「国としても, このプロジェクト自体は終了したが, 別のプロジェクトに関連付け何らかの形で継続したい」と結果に非常に満足していた。

国内にとどまらず, スペインでもこのプロジェクトを手本に新しく類似したプロジェクトを実施しているが, 国境を越えて良きモデルとして今後も展開されていくことを望む。

<sup>i</sup> Par Orav Strande (パー オラブ ストランド), Report on School Grandparents Projects (学校の祖父母プロジェクト報告書) 2007 appendix

<sup>ii</sup> ibid

<sup>iii</sup> ibid